

—— 当事者と家族 ——

「もうちょっとうまいやりかた」へ

矢野 喜正

色覚問題研究グループぱすてる 運営人

# 親が子（本人）に求めていること

- くよくよせず、前向きに生きていくこと
  - 自信をもって生活できるか
  - 目標や興味を失わないでいられるか
  - 人の役に立てるか、社会の役に立てるか
- 困難に遭っても自己解決できるように
  - 色彩に関する困難
  - 人間関係、コミュニケーションの問題
  - 進路、自己実現における不利益への対処
- 心配事があったら打ち明けてほしい
  - 親はいつも子の味方

# 子が親に求めていること

- 無理を言わないでほしい！
  - 子どもの性格や状況・場面をよく見極める。親も自分自身の性質を自覚し、子どもとの関わり方を考える。
  - 「とりあえず実践型」と「トラブル予防型」、一長一短
- 教えて欲しい：私の目は変なの？
  - 当事者よりもその周囲の者の方が、正確な状況・状態（進路適性や診断内容など）を理解しやすい場合がある
- 教えて欲しい：私は何か変なことをやっているの？
  - 色彩に関する社会規範（ルール・モラル・マナーなど）をハッキリと教えられるのは“身内”の人間だけ

# 当事者にしかできない（本人がやるべき）こと

- ・ことばをうまく使う

- ・誤解されてしまうことば：「見える／見えない」「分かる／分からない」「きれい」「鮮やか」など。色名も。

- ・色の見分けのテクニック

- ・視覚の客体化、客観化ができるようになっておく
- ・色彩の使い方（使われ方）を身につけておく

- ・人間関係のテクニック

- ・家庭内だけでなく、あちこちに“味方”をつくっておく
- ・カミングアウトの方法とタイミング

# 家族関係のヒント

- 「当事者の世界」は当事者がつくるもの。家族は“隣人”として寄り添うだけに留めるか、子どもと結託して（何かと）戦おうとするか。いずれにせよ、はっきりとした態度を。
- 家族は、深刻になる必要はまったくないが、かといって放置しておいてよいわけでもない。過保護にならないよう、しかし手遅れにならないように。
- 当事者は自分のことしか見えていないし、しかも自分のことすらよくわかっていない。その上、親が「子どものことしか見えていない」ようでは、親は邪魔な存在になるだけ。家族は、社会をよく見て、社会のしくみを子どもに教えることで、子どもの“味方”になれる。